

【部会活動報告ー近現代史ゼミ部会】

フィールドワークー「無言館」と上田城跡に学ぶ旅

2016年9月24日（土）

心配された天候もほぼ曇り空、帰途に一時雨の程度で、まずまずの条件。今回は20名の参加でした。解説は、無言館については近現代史ゼミ講師の内藤真治さん、上田城跡については歴教協の久保田順一さんが担当しました。

1、戦没画学生慰霊美術館「無言館」

①館主＝窪島誠一郎

1941年生まれ。作家・水上勉の実子だが、2歳の時に靴の修繕を生業としていた窪島夫妻に預けられた。誠一郎が実父の水上勉と再会したのは1977年。1979年に上田市の塩田平に信濃デッサン館を開館、夭折の画家たちの作品を展示している。1997年、無言館を設立、2008年に第二展示館を開館。



②「無言館」設立（1997）の経緯

窪島が画家の野見山暁治（東京美術学校出身）と知り合い、戦没画学生の作品を蒐集、展示することを企画、全国の遺族を訪ね歩いて作品の寄贈・寄託を受け、無言館を開館。2008年に第二展示館「傷ついた画布のドーム」を開館。

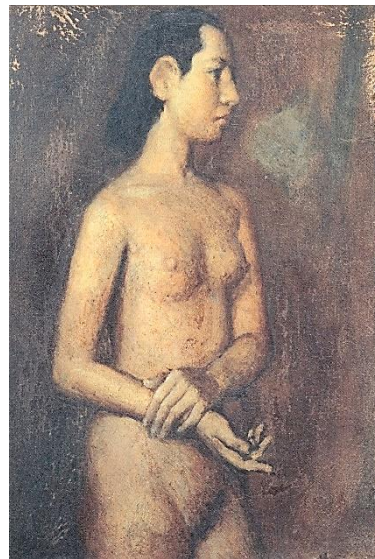
※『「無言館」の詩』講談社（窪島誠一郎著）より

...平成6年2月...（野見山暁治）氏が語った「死んだ仲間たちの絵が今どうなっているのかと思うと気が気ではない」という一言が私の心をゆさぶった。「今からなら間に合うかもしれません。戦没画学生のご遺族と一緒に訪ねませんか。」同年6月頃から

野見山氏と全国行脚が始まったが、...遺作の収集は難航をきわめた。北は北海道江別市から南は鹿児島県種子島まで、当初は東美卒業生だけに限られていた対象を帝国美術学校（後の武蔵野美術大学、多摩美術大学）、京都絵画専門学校（後の京都市立芸術大学）、および独学者にまでひろげて...

③日高安典 〈裸婦〉（油彩・カンヴァス）

73.0×50.4 cm



無言館の入り口に入って間もなく、油彩画「裸婦」がある。作者は日高安典、鹿児島県種子島生まれ、1941年12月、東京美術学校油画科繰り上げ卒業、42年応召、45年4月19日、フィ

リピン・ルソン島で戦死、27歳。

※『「無言館」への旅』小沢書店（窪島誠一郎著）より

（20年ほど前、窪島が種子島に日高安典さんの弟を訪ねたときの会話）

「このモデルは安典さんの恋人だったのでしょうか」。私（窪島）がぶしつけに聞くと、（安典さんの弟の稔典さんは）「さあ、はっきりしませんが、たぶん安典が美校時代にあこがれとったモデルさんなのかもしれませんなあ。...同級生の話で

は、これは卒業する直前に安典が描いていた絵で、生きて帰ったら必ずこの続きを描くからとモデルの女性にいいのこしで出征していったそうです。」

④「傷ついた画布のドーム」－無言館の第2展示館（2008年開館）

※『「戦争」が生んだ絵、奪った絵』（新潮社）より

天井には約360点におよぶ画学生の美校時代の習作、下絵、デッサンが貼りこまれ、館のリピーターたちは「戦没画学生のプラネタリウム」とよぶ。天井からふりそそぐ画学生たちの「生きること」、「描くこと」への執着のまぶしさ...

⑤岩根承成さんの報告

戦没画学生を見渡すと、戦死者の多くが1944年から45年にかけての戦死者という印象。そこで、歴教協の岩根さんの報告。

前橋市域のアジア・太平洋戦争年次別戦死者数（1941年12月～45年8月）

【1】戦死者の82%が最後の1年半に集中。これは全国的にも同様であるはず。

【2】44年6～7月、サイパンはじめマリアナ諸島の陥落により日本軍の敗北は決定的。以後の1年半は「絶望的抗戦期」となる。制海・制空権喪失、戦死者の60%が餓死。

【3】天皇はじめ国家指導部が1944年夏段階で戦争終結へ動かなかった責任。このとき終結していれば、戦死者の80%を救えた。無言館もなかったはず。

2、上田城跡

①場所と地形

上田城は上田盆地のほぼ中央、千曲川の河岸段丘上に位置し、南の断崖を利用している。千曲川支流の尼ヶ淵がその崖下を流れていた。崖に面して本丸、南面以外は水堀が囲む。それをさらに二の丸が囲む。

②時代と変遷

天正11年（1583）、真田昌幸によって築城された上田城は、徳川軍を二度にわたり撃退した難攻不落の城。しかし、現在の城跡は真田時代のものではない。真田信之が1622年に松代に転封された後、一旦破却され、その後に入部した仙石氏によって再建された。明治維新後、西櫓1基を残し、その他の建物は民間に払い下げられた。その後、市内で遊郭（貸座敷）として使われていた2基の櫓を買い戻し、昭和18年（1943）から24年にかけて現在の南櫓・北櫓として再移築し、平成6年（1994）には東虎口櫓門を復元した。

③本丸跡を散策

かつての尼ヶ淵は現在、駐車場や芝生広場、そこから歩いて二の丸東側の空堀（けやき並木遊歩道）に行く。上田電鉄の線路跡（1927～72年）で、ホームや架線の一部が残っている。橋を渡り二の丸跡に入ると、市民会館だった建物が今は「真田丸大河ドラマ館」になって観光客で賑わっている。ドラマ館を左に見ながら進むと、南北の櫓と復元された東虎口楼門、つまり本丸の東側出入り口の門がある。右手の石垣に直径3メートルほどの大石（真田石）。伝説では、信之が松代に移封され



る際、父の形見として持っていこうとしたが全く動かなかった。

門を入ると、正面に真田神社、難攻不落の城であったことから「落ちない」ということで、受験生に人気だとか。

本丸の土塁を一回りする。東北の隅櫓跡付近、土塁が切り込んである。鬼門よけの「隅おとし」といわれるもの。堀の北側、二の丸跡に招魂社が見える。上田招魂社は戊辰戦争以後の戦死者（もちろん官軍、日本軍のみ）を慰霊するために明治2年(1869年)に、城の西方に祭壇を設けたのが起源。さらに進んで、

本丸土塁の西北の隅櫓跡付近。金箔をほどこした瓦が出土していることから、真田氏の上田城が秀吉配下の城だったことがわかる。

最後に本丸西虎口（本丸西出入口）跡、柵形の虎口で、進路を屈曲させて敵の侵入を防ぐ構造になっている。ここにも櫓門があったことがわかっている。



3、参加者の感想より

○一枚いちまいの「絵」から発せられる無言のメッセージは無限の響きとなって館内を充たし、そこに居るだけで全身を突き刺されるような痛みを覚えました。

—あと10分描きたい—

—残った絵の具を全部使い果たしてから死にたい—

その絵に刻まれたかけがえのない生命の叫びと時間に絶句し立ち尽くしました。

深い悲しみと鎮魂、そして激しい怒りと憤りの交錯する中で私は祈りを込めて誓いました。戦争をしてはいけない！！

二度と戦争をしないと謳い上げた日本国憲法を守らなければならない！！と。

(小林 美代子)

○今年も大変お世話になりました。お世話してくださる方々に感謝しております。ありがとうございました。3回目の訪問となります無言館、館長さんはじめ、協力された方々、提出して下さった遺族の方々の思いをしっかりと受けとめたいと思いました。

戦死の報が届いた時に、ご両親が「信じられない」と言われたとの言葉が胸に刺さりました。その時代に居たら私もきっとそう思うと。

内藤先生の「戦病死は餓死だった」とのご説明に、亡くなくても真実を隠す国家の恐さを思いました。また岩根先生による敗戦までの1年半の戦死者が全戦死者の80%にも達するというのを伺い、戦争を終わらせることの難しさを思いました。

天皇の決断が早ければ画学生の生命、この80%の方々の生命が救われたのでしょうか。敗れることが分かっているにもかかわらず続けた指導部への怒り、人の生命の軽さを思った一日でした。

丸木美術館はかつては中学生たちの見学があったそうですが、次第に無くなっていったと聞いています。

「無言館」にしても「丸木美術館」にしても、過去に学ぶ人がたくさん来館しますように。そしてマスコミの報道も」しっかりと行われますようにと願います。

(水沼武彦・安美)
《文責 設楽春樹》